

洪武南藏の入蔵禪籍

椎名宏雄

一、問題点

こんにちわが国の仏教研究者にとって、明版大藏經はなじみが薄い。明藏といえば、明末から清初に刊行された嘉興藏（＝徑山藏）を指すという理解が、まだ一般的な常識のようである。このような理解は、専門的には今やまったく通用しないが、こうした傾向をもたらしている背景には、まず中国仏教の研究への低調さがある。また、日本には明版大藏經の遺品が少ない上に、中国仏教の研究には正統藏や大正藏でたいていは事足りる、という実状も挙げられよう。したがって、戦前に漢文大藏經の研究が活況を呈していた時期ですら、明藏に対する関心は薄く、まして戦後は永らく研究らしきものはほとんどみられぬ状態であった。

こうした状況下にあって、近年は長谷部幽蹊氏によつて明代以後の諸大藏經に関する基礎的な研究の幕が開かれ⁽¹⁾、さらに野沢佳美氏によつてほぼ独演による研究の展開となつた。野沢氏は、日本に現存する大明南藏の遺品である立正大学藏本（五五〇余帖）と山口県快有寺所蔵本（五四〇〇余帖）を苦心調査され、夙に数種の目録や資料集を刊行された。また、これを基に綿密かつ意欲的な研究を重ねられ、従来まったく注意されなかつた戦前の呂激氏による南藏研究の紹介などをも含め、南藏を中心とする基礎的な分野を開拓した『明代大藏經史の研究⁽²⁾』という画期的な成果を挙げられたのである。

野沢氏の本格的な研究によつて、明初における洪武南藏－永樂南藏－永樂北藏という歴史的実態が闡明となつたが、これがやがて明末万曆の南北両藏へとつらなり、さらに嘉興藏

の再編を生むのである。してみると、明代最初の洪武南藏の実態が注目されるのは必然である。洪武南藏については、戦前に四川省上古寺からただ一巻だけが発見され、なるほど前述の呂激氏による調査報告「南藏初刻考」⁽³⁾により、若干の实物写真を添えた基礎的方面的紹介がなされてはいた。しかし、まとまつた仏典の影印公開は、おそらく前世紀末の北京版「中華大藏經（漢文部分）」一〇六冊中に、六種一七四巻が収められたのがその嚆矢であろう。それだけに、一九九九年二月、四川省仏教協会から洪武南藏の影印本が、目録一冊を付して全三〇四巨冊が一挙に刊行されたのは、あたかも二〇世紀の掉尾を飾る仏典の大出版物として、特筆されなければならない。

この影印本は、美しい豪華な装訂もさりながら、B五版二段組みに影印された文字の大きさは圧巻である。『目録』巻首の「再版『洪武南藏』後記」によると、本書は上古寺発見本を影印するが、ごくわずかの欠少部分は「龍藏（清藏）」によつて補い、虫蛀の斑痕はコンピューター処理により消去したという。なるほどそれで新刷のような美しさなのであるが、問題は清藏補配の部分が校注などで明示されないから、本文を精査しないと不明なのが不便である。また、各冊の巻首に記載される収録仏典の細目についても、後述のように誤認があるので注意を要する。こうした細かな問題はあるにし

ても、六百年の星霜を経た天下一本の文字群が、まのあたりにできる法俸をわれわれは喜ばなければならない。

いつたい、洪武南藏なる大藏經は、野沢氏等の研究によれば、洪武五年（二三七二）に南京で業務がはじまり、建文三年（一四〇二）に正藏五九一函が完成した。引続き續藏八七函が加増され、全六七八函七千余巻が完成したのは永樂一二年であるという。しかしその間、永樂六年には火災で板木が焼失したとされる。野沢氏は、洪武南藏を原則として継承しつつ再編された永樂南藏が、その後早くも永樂一七年（一四一九）に完成しているが、それに洪武南藏の板木が多く用いられたのではないかと論考され、また、永樂南藏再編の意義は、建文帝の意向の強い続藏部分を再編集することにあつたといふ、ともに注目すべき論述をされていて⁽⁵⁾いる。

このように、洪武南藏にはまだ解明すべき基礎的な問題はあるが、現藏の影印が公開された以上、筆者は宋元版禪籍の文献史的な考察を進めているため、この藏經に入蔵している禪籍に大きな関心を寄せていく。そこで、ここに入蔵禪籍を表示し、以下、個々の禪籍につき文献上の特徴を指摘したい。こうした考察は、すでに野沢氏によつて鋭く究明されてはいるが、洪武南藏の統藏部分の編集に重要な役割を果したとされる宝嚴淨戒の業務や統藏の性格を、より闡明にさせることにもなるう。

(17)	(16)	(15)	(14)	(13)	(12)	(11)	(10)	(9)	(8)	(7)		(6)	(5)	(4)	(3)	(2)	(1)	No.		
?	?	素 676 魚 678	貢 667 勸 669	譽 606 一之二 九 609	譽 606 一之一	沙 603 馳 605	宣 601 威 602	最 599 精 600	用 597 軍 598	万善同帰集	○明覺禪師語錄	韓 589 煩 591	法 588	法 588	約 587 法 588	濟 549 感 558	振 511 世 513	洪武南藏函号	書名	
○永嘉集	護法論	嘉泰普燈錄	○禪宗頌古聯珠通集	—○古尊宿語錄 —六祖壇經	大慧普覺禪師語錄	○圓悟佛果禪師語錄	○宗門統要統集	卷1、3、8、10、26 —30の各卷欠	完存	全欠	卷首に徐一夔の重刊序（洪武20）あり	卷2、4下、5上、7前半、8、10前半、12中、27、29各欠	卷1、2は補写	卷1～2は補写	卷12、14、15、19、24、25は補写	卷1、3、7、9、34、36、82、84、89は補写、卷10は補刊	各卷末に音釈	各卷末に音釈	存欠状況	
1	1	30	21	48	30	20	17	6	3	—	補写の卷1、2の各卷末に音釈	205	205	205	204、 205	194、 198	183、 184	特徴		
全欠カ											○印は初入蔵書	205	205	205	204、 205	194、 198	183、 184	影印冊No.		
—永樂南藏には入蔵											各卷末に音釈、北京版「中華藏」第75冊に影印	各卷末に音釈、北京版「中華藏」第75冊に影印	各卷末に音釈、北京版「中華藏」第75冊に影印	既刊本を半減等	既刊本を半減等	既刊本を半減等	既刊本を半減等	既刊本を半減等	既刊本を半減等	影印冊No.
		240、 241	236、 237	210		209、 210	208、 209	208			205	205	205	204、 205	194、 198	183、 184	影印冊No.			

二、入蔵禅籍の考察

(1) 景徳伝燈錄

この著名な禪門の燈史文献三〇巻は、宋代の思済藏を除く各時代の大藏經に入蔵している。今日では洪武南藏本（以下、洪武本）以前の古版も少なからず影印され、文献研究に役立つてゐる。すなわち、東禪寺本・金藏本・磧砂本という宋元代の藏經版をはじめ、宋版影印の四部叢刊本と元代延祐本の、計五種が影印されている。圧巻は金藏本を影印収録する北京版「中華大藏經」漢文部分（以下、北京「中華藏」）第七四冊である。

すなわち、ここでは金藏本を底本とし、磧砂本・永樂南藏本・徑山藏本（嘉興藏本）・清藏本の四種で対校し、校注を詳記するなど、テキスト研究に大きく裨益してゐる。

さて、洪武本の本書は、東禪寺本・開元寺本・磧砂本・普寧寺本と同じ函号「振・縷・世」に収録されるが、右に表示したように六巻分は補写であり、本来部分の現存は二四巻である。序跋などはないが、各巻末には音釈が置かれる。また、卷一一の尾題直前の行下部には、「比丘寿介敬書」の六字が刻されている。これらの特徴を前記諸版と照合すると、磧砂本とのみ一致する。

ところが、呂激氏は前述の論文で洪武本「景德伝燈錄」は「延祐重刊本を用う」と記載している。磧砂本は大德一〇

年（一二三〇六）ごろの刊行であるから、呂激氏の言は延祐三年（一二三二六）の湖州道場禪幽庵刊行本を意味するのであろうが、その根拠はなにも示してはいない。しかし、延祐本には楊億の序があり音釈をもたないという外面向的な特徴のみならず、本文の細かな点でも洪武本とは合致しない個所が多く、両本には貸借関係はないと言える。呂激氏には何らかの誤認があつたのであろう。筆者は、本書の洪武本と磧砂本の全般的な対校はまだ行つていないが、現在のところ洪武本の底本は磧砂本の可能性が高いと考える。

(2) 宗鏡錄

永明延寿の撰述した本書は、ひとり禪門だけでなく仏教界で重用されたこともあるて、歴代のほとんどの大藏經に収録されている。宋元版では東禪寺・開元寺・磧砂・普寧寺の各藏經本が現存するうち、磧砂本だけが影印で公開されている。しかし、北京「中華藏」本は高麗版を底本とし、これを磧砂本・永樂南藏本・徑山藏本・清藏本で対校している。

洪武本の現状は、「濟」から「感」までの一〇函に收められるが、全一〇〇巻中の九巻分が補写されるほか、卷一〇は他の刊本で補配されている。特徴としては、各巻末に音釈があること、卷一一～一三と卷一五～二〇の各巻末に、「天台比丘法思重校」なる校勘記が刻されていることである。これ

らの函号や外面的特徴と完全に一致する古版は、延祐二年（一二九五）刊行の磧砂本だけである。全体的に本文は、右の北京「中華藏」本の校注を参照すると、洪武本は磧砂本・永樂本に一致している。したがつて、本書は磧砂本—洪武本—

永樂本という系列にあるものと思われる^⑦。

なお、洪武本の卷一は補写であるが、構成は雍正二年（一七三四）の御製序、後序、上諭、楊傑序、王錢俶序、延寿

序、本文、音釈の順であり、これは清蔵本に同じである。清蔵本といえば、他の藏経本によつて補配される洪武本卷一

〇の函号「秦十」と音釈なしの特徴も、また清蔵本にのみ一致するから、ともに清蔵本によつたのであろう。さらに、卷九九の巻末には音釈がなく、「皇明永曆丙申（一〇年、一六五六）南侶粵甘日沙門法船看記」という墨書がのことされている。

(3) 伝法正宗記

(4) 伝法正宗定祖図

(5) 伝法正宗論

これら三書は、雲門宗の仏日契嵩（一一〇七～一二〇七）が著した燈史文献であり、古來かなりの刊行を数える。元来は三書一体で全一二巻をなすもので、とくに『定祖図』は文字どおり祖師図四六点とその解説文から構成されるが、絵図とともに伝來するテキストは稀である。のみならず、『定祖図』そのものが除外される嘉興藏のような藏経本すらある^⑧。

洪武本の現状は、「約」と「法」に(3)と(5)が収録現存し、

(4)は欠本となつてゐる。これらの収録函号と巻次の関係は、つきのように複雑であるから注意を要する。

『伝法正宗記』 卷一～八（内、一・二は補写）……「約」

一～八

『伝法正宗論』 卷三・四……「法」一

『伝法正宗論』 卷三・四……「法」三・四

右を見ただけでは誰しも理解に苦しむ。そこで前代の磧砂本をみると、これとまったく同じ函号と巻次をなしてゐる。つまり、磧砂本は本来の『正宗記』卷九を「卷一」として「法」函の第一巻に置き、つぎに『定祖図』を卷二、『正宗論』を卷三・四に配置したのである^⑨。洪武本はこれを踏襲したのであろうが、たまたま『定祖図』を欠いたために、難解な函号と巻次となつてしまつたらしい。

いっぽう、洪武本には他本にみられぬ特徴がある。それは、(3)と(5)の各巻末に音釈が付せられていることである。『伝法正宗記』三書のテキストで、音釈をもつものを筆者は知らない。磧砂本も、その底本である開元寺本にも音釈はない。すると、洪武本は底本を磧砂本とし、音釈は新たに加えたのであろうか。これは洪武南藏全体に関わる問題であり、いまにわかつに論じられず、今後の検討にまちたいと思う。

(6) 中峰広録

元代禪界の巨匠、中峰明本（一二六三～一三二三）の全集ともいすべき本書三〇巻も、古來刊行本は多いが、本文内容はほぼ一定している。題名の呼称もさまざまであるが、洪武本はもつとも簡単である。実質的には磧砂本（影印本が複数公開済み）につづく入蔵テキストである。

洪武本は、前記(5)の『伝法正宗論』に接続して、「韓・弊・煩」の三函に各一〇巻づつを収録する。「煩」は第五九一号であり、洪武南藏の正蔵部分の掉尾を飾っている。ただ、表示したように現存状況は前半部分に欠巻や断欠巻が多く、後半では巻二七と巻二九を欠く。さいわい、巻首第一巻と巻尾第三〇巻は現存している。なお、本書を収録する影印「洪武南藏」第二〇五・二〇六冊とも、巻首の目録には實際の収録巻に関する誤認が多いので注意を要する。

洪武本は、本書の文献史上すこぶる重要な本から、ここに全体の構成を示しておこう。

- (1) 重刊序 徐一夔撰、洪武二〇年（一三八七）正月
- (2) 上進表 善達密的理撰、元統二年（一三三四）正月
- (3) 入蔵劄子 元統二年五月
- (4) 序 掲僕斯撰
- (5) 刊行表宣 明瑞撰、元統三年（一三三五）六月
- (6) 総目録

(7) 本文（卷一～三〇）

⑧謝入蔵表 善達密的理撰、元統二年六月

右の構成を磧砂本と照合すると、磧砂本には①がないほかは全同である。もつとも、磧砂本も完本ではなく、巻首は一紙半を欠き、現存部分は②の後半以後である。そこでこの欠丁部分を洪武本によつて精査すると、右の一紙半は②の前半部分の分量と一致するから、磧砂本にはもともと①は存在しなかつたと確認される。それでは、①が「重刊」とする意味はなんであろうか。

いつたい、①の徐一夔序は、本書のわが江戸版・縮蔵本・正蔵本などにも存在するから、比較的容易にみられるのはあるが、これまで筆者を含めて、その意味が正しく把握されていないようである¹⁰⁾。そこで、文中の関連する重要な部分を訓読しておこう。

……總て之を名づけて「天目中峯和尚広録」と曰う。和尚（筆者注、明本のこと）の化去するや、其の徒は朝に表請し、五季に永明寿禪師の著す所の『宗鏡錄』、宋の明教嵩禪師の著す所の『輔教編』『伝法正宗記』の如く、入蔵を賜つて内典と並に行われたきを願う。朝廷は之を允し、杭の南山大普寧寺にて鏤板するも、未だ広布に及ばずして数小劫に遭い、板は寺と俱に燬もゆ。武弁の士、張子華と曰う者あり。善人なる也、其の殘編を得、之を読みて惕然り、中

に省あり。……吳山に雲居菴あり。亦た和尚の法嗣の築^{アサ}る所なり。子華、其の菴の上首たる智嵩・慧沢の二師に謀りて曰く、「吾れ『廣錄』を重刊し、以て広く流通せんと願う。吾れ已^シ橐^{カネ}を捐^スし之を為さんと倡^スえれば、師等皆な其道を唱える者、也た幸に我が募縁を助けて之を成せしめん」と。一師曰く、「是れ吾が志なり」と。時に和尚の慈風、人に被^スぶ者、未だ泯^スびず。助を樂む者は衆^ク、板材既に具わる。日を擇びて工に命じ、以て鏤刻ませしむ。年を逾えて功完り、余に序を為すよう請む。……

右のように、『中峰廣錄』はかつて杭州南山の大普寧寺版大藏經に入藏が許され、その板木の雕造が成ったのも束の間、未だ印造されぬうちに羅災し、寺とともに焼失してしまつたのである。この藏經は元の至元二七年（一二九〇）に完成し、九年後の大德三年（一二九九）になつて目録が刊行されているが、そこにはまだ当該の『中峰廣錄』は含まれていない。

普寧藏は、そののち元末まで印經活動を続けていたが、泰定元年（一二三四）には『景德伝燈錄』を入藏刊行するなど、新たな仏典の補続入藏もなされていていたのである。あたかも、洪武本『中峰廣錄』に前付される上表文は元統二年であり、入藏許可の聖旨と雕造は翌元統三年（一二三五）であるから、普寧寺の焼失はその後まもなくであつたと思われる。

ともあれ、いま本書の文献史上重要なのは、右に引いた重

刊序は洪武南藏に入藏したときのものではないことである。これは、張子華と吳山雲居菴の智嵩・慧沢等の力によつて民間から施財を募り、本書を刊行した際に付せられた序である。洪武南藏は官版であるから、民間からの募財などするはずはない。また一方、張子華が得たのは本書の残編と述べているから、刊行に当つては當時すでに磧砂藏に入藏していたはずの磧砂本を底本とし、これを吳山あたりで重刊したのである。洪武本もまた磧砂本を底本としたが、その巻頭には特に①の重刊序を、この私版から採録して置いたのではないであろうか。なぜならば、①は前掲の普寧藏との関係を記す重要な②③④⑤⑧の由来と、にもかかわらず羅災により普寧本が伝存しない理由を説明する絶好の一文であつたからである。

ちなみに、張子華等による私版は伝存を聞かず、また、北京図書館と台北図書館に所在する元末明刻本とされるものも、それとは別版のようである。¹³また、永樂南藏本には①があることなどから、洪武本の改版とみられる。このように、本書の存在は普寧・磧砂・洪武・永樂の各藏經をめぐる多彩かつ重要な課題を内包するとともに、幻の普寧本と私版、断欠本の磧砂本・洪武本・永樂本というテキスト上の問題もからんで、古版類の総合的な文献研究はまだ今後における多角的な検討が必要である。

(7)、万善同帰集 (8)、明覺禪師語錄

以下は洪武南藏の続蔵部分への入蔵書であり、前述のよう
に建文年間以後に補入された禪籍類である。呂澂氏は、さ
きの論文で「用」(五九七号)から「軍」(五九八号)には『六
祖壇經』『万善同帰集』『明覺語錄』の三書が含まれていると
紹介するのであるが、これらはいずれも影印されておらず、
現存状況は不明である。呂氏によれば、洪武南藏は発見当初
に少なからず散失したとされ⁽¹⁴⁾、また近年になって若干が巷間
に流出したといわれるから、これらの三書も上古寺から失わ
れた可能性が高く、これはたいへん残念なことである。

ただ、『六祖壇經』がこの部分に収録されていたとするの
は注意を要する。なぜならば、筆者は後述するように、(13)
『古尊宿語錄』の巻頭に『六祖壇經』は置かれていたと考え
るからである。呂澂氏の見た『六祖壇經』は、あるいは後
部の函から分離して「用」に入れられていたか、または別の
蔵経本などではなかつたであろうか。ちなみに、『六祖壇經』

はつきの永樂南藏では「密」函に收められているが、『万善
同帰集』は入蔵されていない。したがつて、洪武本の散失は
遺憾のきわみである。

(8)の『明覺禪師語錄』は雲門宗中興の祖といわれる雲竇重
顕(九八〇~一〇五二)の語錄であり、洪武本は初入蔵であつ
た。続蔵部分の編纂に重要な役割を果した淨戒の重刊本であ

つただけに、その散失もまた残念である。

ただししかし、この洪武本はほぼ忠実に永樂南藏本に継承さ
れたようである。北京「中華藏」第七六冊に、本書は永樂北
藏本六卷を底本とし、これを永樂南藏本と嘉興藏本で対校し
ているのはありがたい。その影印本文と校注によれば、永樂
南藏本の各巻首に「僧錄司有闡教兼靈谷禪寺住持淨戒重校」
とあつた刻記が、永樂北藏本では原編者の名に変わり、本文
内容にもかなりの出入や移動のあることが知られる。⁽¹⁵⁾ いうま
でもなく、北藏本は南藏本とは底本を異にし、洪武本以前の
元版によつたのである。いま、これを詳述する余裕はない
が、要するに洪武本の内容は永樂南藏本によつて知られるわ
けであり、それは元版や五山版にくらべて大胆な再編書であ
つたことは、これによつて一層明らかになつたといえよう。
なお、永樂北藏本はのちの嘉興藏本と同内容であり、その貸
借関係をものがたつている。

(9)、圓悟佛果禪師語錄

本書は、『碧巖集』の作者として知られる北宋末の圓悟克
勤(一〇六三~一三五)の語錄であり、初の入蔵書がこの洪
武本であった。しかも、洪武本は「最」函に卷一から九、
「精」函に卷一〇から一七までを收め、全一七巻の完本が伝
存し影印されたのである。本書もまた淨戒による重刊本であ

るが、淨戒は大慧派第八世の人であり、圓悟は大慧の本師であるという関係も注目すべきである。

洪武本の特徴は、のちのすべてのテキストにみえる耿延禱と張浚の宋代二序を卷頭に置くこと、永樂南藏本と同じ一七卷であることなどである。一七卷本は、ほかに永樂北藏本や清藏本があり、嘉興藏本では二〇卷となり、これが大正藏本など通行本の祖本となっている。つまり、一七卷本の嚆矢は洪武本であり、その調卷は淨戒の再編による。淨戒以前には、元の大德二年（一二九八）と後至元二年（一二三三六）に寺院版の各一〇卷本が刊行されていて、前者は大谷大学に唯一の原本がある。後者は伝存が知られないが、これを覆刻した五山版が成竇堂文庫に所蔵される。

さきに筆者はこれらの古版類を調査し、卷頭に二序を置くなどの特徴から、より整理された形をとる後至元二年本を淨戒は底本として一七卷に細分したと考えたが、¹⁸⁾洪武本の影印をみるとことによって、それは一層補強された感をいだく。なお、北京「中華藏」第七六・七七冊には、本書の永樂北藏本が影印され、永樂南藏・嘉興藏・清藏の各本で対校されているが、底本では南藏本に存在した淨戒重校の署名が『明覺禪師語錄』と同様にすべて削除され、代って元版にみられた原編者名に変わっている。おそらく、元版を底本としたからであろう。

(10) 宗門統要續集

本書は、もともと北宋期に成立した禅門の公案集成『宗門統要集』一〇巻の増広書であり、元代の泰定元年（一二三二四）に金陵保寧寺の古林清茂による増補である。洪武南藏に初入藏して以降、ほとんどの藏經に収められるが、成立以来、一二巻→二〇巻→二二巻という調卷の変遷があり、嘉興藏本の二二巻が通行本を決定づけている。

洪武本は二〇巻本の最初であり、前記(9)の『圓悟佛果禪師語錄』に続いて「宣・威」の両函にそれぞれ九巻と一一巻づく配置され、欠巻のない完本である。書誌的な特徴は、他本にくらべて卷首に二つの序を置き、目録がなく、卷末には跋や刊記もなく、「看藏僧止休」なる墨書がみられる。卷一八の末尾、卷二〇の中間と末尾には、それぞれ収録仏祖の数と機縁公案の則数が青原下・南岳下の別に記載されるが、これは成立以来の各テキストに共通する数である。つまり、本書の本文内容は洪武本も各本も不变なのである。異なるものは、序跋や目録や調卷などの付属的外的な部分である。

そこで、これを古い元版二種と明代の各藏經本との間で比較してみよう。なお、元版は泰定二年（一二三二五）に湖州道場寺の刊行で現存唯一の内閣文庫所蔵本（一二二巻本）と、その覆刻版である明州大慈寺刊でやはり天下一本のイエール大学所蔵本¹⁹⁾（現存六巻）により、永樂南藏本と永樂北藏本は、底本を

北藏本で対校を南藏本とする北京「中華藏」第七七冊所収のテキストによる。数字は収録順である。

構成内容	道場寺版	大慈寺版	洪武本	永樂南本	永樂北本	嘉興本
姚寧の前集序	3					
宗永の前集記		6				
耿延禧の前集重開序		2	5			
希陵の統集序	1	4	1	2		
馮子振の統集序		3	1	2		
総目録	4	2	3	2	1	2
本文	8	6 (12巻)	3 (20巻)	3 (20巻)	4 (20巻)	5 (22巻)
古林の後序		1				
校讃						
音釈						
7	6		1	4	2	3

が、洪武本の公刊によつてそれはより明瞭となつた。
永樂南藏本は洪武本を踏襲するが、永樂北藏本はおそらく大慈寺版から、統集の編集状況を詳記する馮序を探つたのであろう。こうして北藏本を承ける嘉興藏本では、総目録、および各巻末に校讃と音釈が付されて著しく便利かつ学術的となり、流布本にふさわしくなる。その意味では、本書の変遷はまさしく明代各藏經本にみられる変遷過程の一典型を示すものといえよう。

(11) 大慧普覺禪師語錄

本書三〇巻は、大慧宗杲（一一八九～一二六三）一代の語録である。入藏本としては、乾道七～八年（一一七一～二）に開雕され、福州の東禪寺版・開元寺版の両藏經統藏部分に、ほぼ同時に補入されている。²⁰その後は元代の官刻大藏經に入蔵していることが遺品によつて知られるのみであるから、明初の洪武本は影印テキストとしては目下のところ最古のものである。

右の簡単な対照表でも明らかなように、洪武本は先行本の序跋等を大幅に整理し、前集の莆田重開本に付せられた耿延禧序（一二三三）と、統集の初刊本に冠せられた徑山万寿寺虎谷希陵の序（一二三〇）だけを取り、調卷は便宜的に開いて二〇巻としたことが知られる。二序の順序や馮子振の序がない点からみて、直接の底本は道場寺版であつたと考えられる。各本の調卷の変遷については、さきに筆者が考察している²⁰。

洪武本は、(10)の『宗門統要統集』に続き、「沙・漠・馳」の三函に三〇巻を収めるが、現状は惜しくも九巻分を欠き、特に巻一と巻三〇を欠いている。したがつて、巻首と巻尾における序跋などの存否は不明である。ただし、北京「中華藏」第七七冊には永樂北藏本を影印し、永樂南藏本と嘉興藏本で

対校している。それによれば、いずれのテキストも右の宋代福州版藏經本と同じく、卷首には①蘊聞の入藏奏劄、②德潛の刊行題記、卷末には③蘊聞の入藏謝劄が存在する。したがって、洪武本もまた同様であつた可能性が高いと考えられる。本文を部分対校した限りでは、本書も前掲(9)の『圓悟佛果禪師語錄』や(10)の『宗門統要統集』と同じく、本文については他本との差異は僅少のようである。

(12) 六祖壇經

(13) 古尊宿語錄

洪武本は、これら両書を合体して『古尊宿語錄』四八巻とする特異なテキストであり、かつ、淨戒の重校本中もつとも意図的な再編書であつて、洪武南藏統藏部の大きな特徴を示すものである。野沢氏はすでに永樂南藏本の精査検討によつて、洪武本の特殊性⁽²⁾ひいては淨戒の重校内容全般などを意欲的に解明されている⁽³⁾。したがつて、ここでは洪武本の影印によつて新たに得た知見を主とした記述としたい。

まず、(7)と(8)の項でふれたように、呂澂氏が『六祖壇經』を「用・軍」の函にありとするのは、現存する『古尊宿語錄』の函号とその巻八末尾にみえる淨戒の識語による限り、何かの誤認とみななければならない。洪武本の『古尊宿語錄』は、さきの(11)『大慧普覺禪師語錄』に接続する「譽・九」の二函に四八巻を収録する。ただ、現状は惜しくも三〇巻分を欠く

断欠本であり、特に卷首と卷末を欠くのは残念である。現存する最初の一冊は「卷第一之二」とあり、函号は「譽二」であるから、当然その直前に「卷第一之一・譽一」の一帖が置かれていたはずである。「第一之二」は、南岳・馬祖の行状と百丈の語句から始まつてゐる。

つぎに、淨戒の識語なるものは、卷八の末尾に物初大觀の重刊序に接続して刻記されている。物初の文は咸淳三年(一二六七)に本書が二五卷二冊として杭州から覺心居士が重刊した際の旧序であり、正統藏本などでは卷首に移録されてゐるから比較的よく知られている。問題は、統藏本などではこれに続く無署名の付記七行である。この「付記」については、『古尊宿語錄』の古版研究に先鞭をつけられた柳田聖山氏により、淨戒の語であるとの推測がなされていた。⁽²⁾

この「付記」は、北京「中華藏」第七七冊に影印された本書の永樂南藏本でも、やはり統藏本と同じ記載であつて、それ以上の解説にはいたらなかつた。ところが、洪武本にはこれに続く長文の識語をはじめ、年記を伴つた淨戒の署名が存在するのである。筆者はこれを見いだした際の驚きと昂奮、そして柳田氏の炯眼への畏敬を忘ることはできない。ともあれ、まがあたりにみる淨戒の識語全文は、本書重校の内容が一挙に闡明となるのみか、洪武藏經統藏の性格解明にとても重要である。このような観点から、以下全文の訓読と本

文を併せて示そう。

せんようかた

唐宋の諸碩師は、仏心宗を伝えて、道大れ徳備わり、室中にて垂示し学者を勘弁し、徵・拈・代・別するに皆な機語ありて、寰中に流布すること久し。惟だ『伝燈』の一書のみは嘗て入蔵を賜いしも、諸師の語を『伝燈』には備さに載せる能わざる者あり。頤公藏主は、別に南泉・趙州・黃檗・臨濟・雲門・真淨・仏眼・東山など一十余家を集め、総じて若干卷とし、之に題して「古尊宿語」と曰う。實に宗門に補あり。

大明改元己卯（建文元年、一三九九）の春、仏心天子、重ねて大藏經板を刻し、諸宗の関かる伝道の書を、制により収め入るを許す。吾が宗は語言文字に執せずと然雖も、古尊宿の語や諸錄の若きは實に後学の指南にて、又た無くべからざるものなり。乃で、旧本の贍錄に依り重ねて校正を加え、「伝燈」と重複するは之を去き、謹しんで「六祖壇經」を首に列し、南岳と「馬祖四家」の語を之に継げ、曠公の未だ収めざる者は則ち「廣燈錄」や諸書より採り、以て尊宿の語を聯ね、南岳より晦機等に至るに、又に通て四十二家を得たり。共て四十八卷、謹んで縹写して刊に進む。經・律・論と与に永久に流通せんことを。故に此れを書き、以て識す。

歲月は云れ三年を越へ壬午（建文四年、一四〇二）の春なり。

僧録司左講經、兼鷄鳴禪寺の住持、沙門の幻居なる淨戒、謹んで識す。

唐宋諸碩師、傳佛心宗、道大徳備、室中番示勘辨學者、徵拈代別皆有機語、流布寰中久矣。惟傳燈一書嘗賜入藏、諸師之語、傳燈不能偽戴者有。頤公藏主、別集南泉・趙州・黃檗・臨濟・雲門・真淨・佛眼・東山二十餘家、總若干卷、題之曰古尊宿語。實有補於宗門。

大明改元己卯春、佛心天子、重刻大藏經板、諸宗有關傳道之書、制許収入。然吾宗雖不執語言文字、若古尊宿語諸錄、實後學指南、又不可無者。乃依舊本贍錄、重加校正、傳燈重複者去之、謹以六祖壇經列于首、南岳馬祖四家語繼之、而頤公所未收者、則採廣燈錄諸書、以聯尊宿語、自南岳至晦機等、又通得四十二家。共四十八卷、謹繕寫進刊。與經律論永久流通。故書此、以識。歲月云越三年壬午春。

僧録司左講經兼雞鳴禪寺住持、沙門幻居淨戒、謹識。

この識語によつて、淨戒が行つた『古尊宿語錄』の重校につき、明らかとなつた事項を整理してみよう。

- ①旧本の贍錄を重校した。
- ②『景德伝燈錄』と重複する語句は除去した。

- (3)『六祖壇經』を巻首に置き、『馬祖四家』の語句をこれに続けた。
- (4)旧本に未収の者は『天聖広燈錄』や諸書から採録した。
- (5)全体を南岳より晦機まで四二家四八巻とした。
- (6)この仕事には三年を要した。

ほぼ以上であり、(1)～(4)は底本・添削・典拠・排列などの、

(5)(6)は調査と重校期間に関するそれぞれ記載である。が、何といつても最大の瞠目は(3)の『六祖壇經』の配置であろう。さきにいう本書の「巻第一之一」には、なんと『六祖壇經』が置かれていたのである。惜しくもこの部分を欠く洪武本の内容は、さいわいにも永樂南藏本によつて知られる。永樂南

藏本の『六祖壇經』は、すでに柳田氏編⁽²⁵⁾『六祖壇經諸本集成』中にわが快有寺本の影印が收められているが、それはあたかも流布本系『六祖壇經』の前半部分のみに該当するふしげなテキストであつた。

このテキストについては、宗宝本を主とし、徳異本等を参考にして再編したものという『慧能研究』の解題⁽²⁶⁾にゆづるが、いま改めてこの南藏本をよくみると、要するに六祖慧能が韶州城内の大梵寺で一千余人の道俗のために行つたとされる「大梵寺説法」の語句と、仏日契嵩の「壇經贊」とから成ることがわかる。つまり、重校者淨戒は禪門古尊宿四二家の語句を選んだ筆頭に六祖の説法語句を置き、以下、南岳と「馬

祖四家」以下の語句をつらね、尊宿語句の系列化を企つたのである。淨戒自身は南岳系につらなる大慧派八世の人であり、洪武本『古尊宿語錄』の再編に当つては、巻二一にこれまでの古版になかつた大慧派の祖師たちの語句を多数収録させた意味については、野沢氏による詳細な検討のとおりである。⁽²⁷⁾かくして淨戒は、禪門を代表する祖師たちの語句を系列化することにより、六祖からおのれに至る大慧派がその嫡流であるとの主張をなしたのである。永樂南藏本が淨戒識語の後半を署名とともにカットしたのは、この部分が淨戒による変更をあまりにも生々しく明示していることに配慮したからではなかつたであろうか。

ともあれ、語錄の系列化は、悟証機縁の『景德伝燈錄』、公案の『宗門統要集』などと機を一にするものとして注意すべきである。さらに、南宋から元代にかけて大慧派が産出した『人天眼目』『五燈会元』『勅修百丈清規』『秩氏稽古略』などの、いわば禪門の活動を大慧派を中心として総括しようとした典籍の一つとして、本書を位置づけることもできよう。ただし、淨戒の傑作であつた洪武本『古尊宿語錄』は、永樂南藏こそ踏襲したものの永樂北藏では削除の対象となり、ふたたび新たに編集されて入藏するのは明末の嘉興藏をまたねばならない。嘉興藏本の文献的問題は、いまは検討の範囲をこえる。

(14)、禪宗頌古聯珠通集

本書も淨戒による重校本である。もともと本書は、宋代に宝鑑大師法応が禪門の公案三三五則と、それに対する頌二二〇〇首を集め、張掄が淳熙六年（一一七九）に序を冠して刊行した。これを元の延祐四年（一二三七）に魯庵普会が四九三則三〇五〇首を増補して四〇卷とし、自序と馮子振の序を付して刊行した。これをさらに淨戒が洪武二五年（一二三九二）に重刊している。淨戒は本書を洪武南藏に入藏する際、また再編して二二卷としたのである。

洪武本の現状は、函号「貢・新・勸」に各七巻づつが収められる。ただし、表示したように四巻分以上を欠いている。さいわい、巻首巻一と巻尾巻二は完全である。本テキストの内容は、北京「中華藏」第七八冊に影印される完本の永樂南藏本と同じであるから、洪武本の欠は永樂本で補われる。ただ、なぜか洪武本が欠いている巻二二の巻末に、永樂本には「永樂二年甲申（一四〇四）夏五月 命工補刊 謹識」²⁸の刻書があり、洪武本当時の刊記を遺存しているのは貴重である。ところで、淨戒は本書の重校に関する識語をどこにも遺していないので、本文を調査して知るほかはない。しかし、洪武本に先行する元版の四〇巻本は伝本が知られないから、これを承けると思われる後の嘉興藏本四〇巻と洪武本とを对照

するほかはない。両者を対照すると、まず洪武本が巻数を半減していることについては、宗派や嗣承の別を整理したり分量を削減したりしたのではなく、便宜的に三函に七巻づつを配したためと考えられる。巻数の半減から推して、筆者はさきに淨戒が先行本を節録したのではないかと推定したが、これは訂正したい。のみならず、さいごの巻二二を精査すると、五名の祖師が新たに加わり、機縁七、それに対する拈頌一三、が増加しているのである。

増加された祖師と機縁・拈頌は、①北磾居簡（機縁二、拈頌五）、②物初大觀（同一、同二）、③晦機元熙（同一、同三）、④笑隱大訴（同二、同二）、⑤覺源慧曇（同一、同一）である。いうまでもなく、これは大慧—拙庵—北磾—物初—晦機—笑隱—覺源—寶巖淨戒と、淨戒につらなる大慧派の祖師たちの語句である。大慧と拙庵のものは、すでに同じ巻に収められていたから、これで大慧派の祖師はみごとに聯珠のごとく巻二二に揃つたのである。しかも、拈頌者たちもすべて大慧派の人びとによって占められ、これらの語が他の宗派の祖師たちの間に巧みに配置されていることが判明する。

こうした淨戒による増添の措置は、まさしく『古尊宿語錄』の場合と機を一にするものであり、自らの属する大慧派、それもおのれに直結する祖師が、禪門の嫡流であることを暗に示そうとしたものであろう。偶然かあらぬか、本書も『古尊

宿語録』も、ともに卷二一にみられる現象であつた。そして、これらの重校書は時を経ずして永楽北藏では削除されてしまつが、右にみたような意図的・恣意的な措置もその原因の一いつとなつたことは、想像に難くない。⁽³⁹⁾

(15)、嘉泰普燈錄

本書は、嘉泰四年（一二〇四）に雷庵正受が編成した燈史書三〇卷である。現存するいずれのテキストにもみられる、卷首に置かれる上進書の存在などにより、成立後ただちに入藏されたとみられるが、意外にも宋元代の各藏經中には現存が確認されず、目録に著録されてもいない。

洪武本は、続藏部分の最後に置かれ、「素・史・魚」（六七六～六七八号）の各函に一〇巻づつが收まり、しかも完本が現存する。各巻末には音釈が付せられている。完本であるため、北京「中華藏」第七五冊中に影印されているが、対校はなされていない。永樂南藏をはじめ、嘉興藏・清藏のいずれにも入藏していないからである。つまり、中国の入藏書では洪武本が目下唯一の存在であり、そこぶる貴重なテキストである。ところが、右の影印をみると音釈がない。これは、影印収録の際に音釈をすべてカットしたとしか考えられず、資料性の上からはたいへん遺憾である。

本書の構成は、①黄汝霖の雷庵行業、②嘉泰四年（一二〇

四）の陸游書、③進上皇帝書、④総目、⑤本文（卷一～三〇）で聖旨はなく、また出續藏本が③を卷三〇の末尾に配するのも異なる。洪武本の巻末には、音釈のつぎに「道光十年（一八二七）又四月初四日檢藏僧壽惠粘補过言耳」なる修補識語が墨書きされている。いつたい、本書の現存最古版とみられるものは北京図書館蔵、嘉定年間の杭州淨慈寺刊本であり、その覆宋版とされる五山版も多い。また、わが江戸期には何度かの刊行がなされているが、これらを加えた全体的な文献史的考察はまだ今後にのこされている。それだけに、洪武本の影印提供は貴重である。

本書は淨戒による重校本ではない。ただし、大慧宗杲の条を収める最初の燈史であり、出家の語句を収録する卷一～二一のうち、さいごの卷一八から二一までの部分は大慧派の人々が席巻している。したがつて、禪門五燈の中では、淨戒がもつとも好んだ書とみてよい。もとより憶測にすぎないが、本書が続藏の棹尾を飾る仏書であることとともに、ここにも淨戒の影が考えられないであろうか。近年、本書は宋代禪の性格解明の上から注目されているだけに、基礎的な文献研究の要を痛感する。

しているものに『護法論』（宋函、五四四号）と『永嘉集』（起函、五九三号）がある。野沢氏は、これらの両書も洪武藏に入蔵していた可能性が高いとされる。^{（6）} ただ、目下のところ客観的にそれを立証する資料を知らないので、これは今後の考究にまちたいと思う。

以上、洪武南藏の入藏禅籍についての表面的、かつ粗雑な文献上の考察にすぎなかつたが、洪武本はいずれも貴重な資料であることが認識された。特に個々の典籍について、宋元版や五山版などの古版類と、ほとんど後代の流布本の祖本となつてゐる嘉興藏本との、両者の関係を解明するためには、洪武本はたいへん重要な地位にあるといえよう。

- (1) 長谷部氏が『愛知学院大学論叢（一般教育研究）』に発表されたこれらの論文は、後に長谷部氏著『明清仏教研究資料（文献之部）』（名古屋、駒田印刷、昭和六二年一一月）第一編「明代以降における藏經の開雕」にまとめられている。
- (2) 東京、汲古書院刊、一九九八年一〇月。
- (3) 『内院雜刊入蜀之作二』（江津県、一九九八年）。のち『歐陽大師遺集』（台北、新文豐出版公司）二に移録。
- (4) 前掲（2）野沢氏著書、一七三頁による。
- (5) 同右、第五章「洪武南藏から永樂南藏へ」を参照。
- (6) 宋元版の『景德伝燈錄』諸本の系譜はまだ検討すべき点があるが、筆者は金蔵本を考察した結果を「金蔵本『景德伝燈錄』の性格」（『宗学研究』第四〇号、一九九八年三月）で示しておいた。

- (7) 『宗鏡錄』の成立と宋元版の系譜はまだ未解明の分野であり、福州版両大藏經本の調査検討を前提としなければならない。
- (8) 摂稿「伝法正宗記」諸本の系統』（『松ヶ岡文庫研究年報』第二号、一九九八年二月）。
- (9) この函号と卷次の状況については、北京「中華藏」第七八冊所収の『輔教編』上巻の校注に記載がある（三〇〇頁b）。
- (10) 摂著『宋元版禅籍の研究』（東京、大東出版社、一九九三年八月）二八四一五頁。摂稿『宋元版禅籍研究』（十）一天目中峰広録・天如惟則語錄』（『印度学仏教学研究』第三九卷第一号、平成二年一二月）ではまだ検討が十分でない。
- (11) 筏沙雅章『宋元仏教文化史研究』（東京、汲古書院、二〇〇〇年八月）三五二頁を参照。
- (12) 前掲注（10）摂著、二七四一七頁。
- (13) 北京図書館所蔵本は『北京図書館珍本叢刊』77（北京、書目文献出版社）中に影印され、三〇卷中存一九卷の端本であり（拠元統三年釈明瑞摹刻本影印）とされているが、これは台北の国立中央図書館所蔵の三〇卷一〇冊本と版式、内容・助縁者などの一致により同一版と認められることが、阿部隆一『増訂中國訪書志』（汲古書院、昭和五八年三月増訂）五三三頁b～五三四頁bの解題によつて知られる。いずれも砂本と同じ函号をもつ冊子本である。
- (14) 前掲注（3）の『歐陽大師遺集』二に所収される「得初刻南藏記」による。
- (15) この流出については前掲注（2）野沢氏著、一四一～四頁にくわしい。
- (16) 摂稿「明覺禪師語錄」諸本の系統』（『駒澤大学仏教学部論集』第二六号、平成七年一〇月）。

- (17) 拙稿「圓悟の『語錄』と『心要』の諸本」（印度学仏教学研究）第四五卷第一号、平成八年一二月。
- (18) この内閣文庫蔵の元版は、柳田聖山・椎名宏雄編『禪學典籍叢刊』第一卷（京都、臨川書店、一九九九年四月）に影印され、椎名が解題を付している。
- (19) 本書については慶應義塾大學斯道文庫の住吉朋彦氏が二〇〇三年夏に調査され、その書誌を筆者にご教示くださつたもので、從来まったく未知の古版一本の所在が初めて知られた貴重な成果である。
- (20) 前掲注(18)の解題。
- (21) 石井修道「大慧語錄の基礎的研究（上）」（駒澤大学仏教学部研究紀要）第三二号、昭和四八年三月。
- (22) 前掲注(2)の野沢氏著、第一部第八章「南藏本『古尊宿語錄』について」にくわしい。
- (23) 「古尊宿語錄考」（花園大学研究紀要）第二号、昭和四六年三月。のち「禪學叢書」之一『無著校写古尊宿語要』（京都、中文出版社、一九七三年三月）、附録に収載。
- (24) 『洪武南藏』第二二一〇冊、三四〇頁a～三四一頁a。
- (25) 一六五頁c～一八八頁。なお、快有寺本の『六祖壇經』は「密一」の函号であり、以下「密一」から「士一十二」までは『古尊宿語錄』四八巻が収録されている。くわしくは山口県教育委員会編刊『快有寺一切經調查報告書』（平成四年三月）一二五八a～二六〇頁b。
- (26) 駒澤大学禪宗史研究会編『慧能研究』（東京、大修館書店、昭和五三年三月）四一二二頁b～四一四頁b。
- (27) 前掲注(22)を参照。
- (28) 八五四頁c。なお、「中華藏」は本書に引続き『禪宗頌古聯珠通集』（別本）として嘉興藏本四〇巻をも影印している。

洪武南藏の入蔵禪籍（椎名）

- (29) 前掲注(10)拙著、三三六～七頁。
- (30) 野沢氏は洪武南藏の板木は焼失を免れて永樂南藏の印造に転用されたのではないかと論述され、その根拠の一つに南藏では本書の巻題の次行に淨戒の署名が埋木されていることを挙げられている（『明代大藏經史の研究』一五一～二頁）。しかし、本書の洪武・永樂兩藏経本を対照すると組版はまったく異なるから、本書は、少なくとも板木の共用はなされていない。
- (31) たとえば鈴木哲雄編『宋代禪宗の社会的影響』（東京、山喜房仙書林、平成一四年一一月）所収 石井修道「南宋禪をどうとらえるか」を参照（一〇一～一二三頁）。
- (32) 前掲注(2) 野沢氏著書。『護法論』については五〇頁、『永嘉集』については一二〇頁、を特に参照。